

# 共同研究「学知と教育から見直す近代日本の歴史像」の経過と概要

樋口雄彦

## 一 期間

二〇一八年四月～二〇二二年三月

## 二 目的

本研究は、幕末から明治期までを対象に、近代「日本」や国民としての「日本人」が生成される過程を、学知・教育・宗教・文化といった諸側面から総合的に見直すことによって、従来の個別分野毎による位置づけを超え、多様かつ多層なひとびとの生きる姿を描き出すことを目指す。

近世から近代に移行する時期においては、留学・移住など人々の動きのスケールがそれまでに比べ大きく変化した。加えて、西洋文化、宗教、「近代的」という概念に包含される学問や医療・衛生などの新しい考え方が日本に入り、人々の日常に大きな変容を迫った。そればかりでなく、「西洋」におけるジャポニスムの勃興や近隣国から日本への使節派遣など、日本と外国を往還する人・モノも飛躍的に増加した。

これらにおいてとくに着目すべきは、歴史事象も人々の日常も同様に、多数派から少数派へ、強者から弱者へと一方向的に流れるものでは

なく、あくまで双方向性、相互性の中で生成されるものであるという視角である。ときには緊張感に満ちた中で相互の渡り合いのなかで変容のプロセスが進行していった（あるいは進行できなかった）側面を描出し、その具体的な事象から全体像を展望することが必要である。

このような課題の考察は、「幕末から明治」「近世から近代」のようにこれまで自明と思われる傾向にあった歴史区分や「日本史」像を再検討することにもつながるものといえる。さらに、当該時期のアジアを見渡せば、近世教育機関から近代学校への移行は、儒教の否定、科擧の廃止、手習塾（朝鮮の書堂、台湾の書房）の衰退などさまざまに通底する問題をはらんだものであったことがいっそう浮き彫りになるものと予想される。このように学際的、国際的に広範囲な目配りをした上で研究を実施し、国立歴史民俗博物館が創設以来の理念としてきた生活史の視点を重視して、研究成果として展示の高度化に資するものとする。

本研究は、一八〇〇年代半ばから一九一〇年代までを対象に、「情報」の伝播と具体的な人々のありかた（「積極的な受容や、消極的な受け止め、あるいは恐怖や拒絶、さらには他者への媒介など」）に、以下二つの方法で接近する。第一に、館蔵資料を中心とする既存の文書群を、協働的に読み直し、新たな体系のもとで上記の具体相を示すことである。第

二に、フィールドワークをしながら新たな資料を発掘し、これまでは少数であることなどを背景に「日本史」研究としての蓄積が多くはなかった事象（例えば樺太や千島のアイヌにとつての「日本」像や、学校教育や近代医療を受けられないひとびとにとつての「近代」、東北地方にとつてのキリスト教（ロシア正教）信仰など）の掘り起こしと共有化を進めることを通じて、「外」から「宗教」や「学校教育」、「衛生」などの概念をもって迫られた信仰や学びのありかた、病や習俗祭祀の変容を浮彫りにすることである。こうした目的を達成すべく、AとB、二つの研究班を設け、両者を有機的に連携させながら共同研究をおこなう。A班は主に幕末から明治期を担当し、上記第一のアプローチから共同研究を実施する。具体的には、これまで歴博が収集してきた木戸孝允関係資料・平田篤胤関係資料・大久保利通関係資料・砲術関係資料・自由民権関係資料や館外の諸資料を、新たな見方で複眼的に読み直す作業が中心となる。上記第二の方法を主に担当するB班は、明治の「国民形成」期から大正期に及ぶ「帝国主義」時代までを展望し、フィールドワーク／新資料発掘とその共有化の作業を中心とする。

### 三 各年度の経過と成果

#### 二〇一八年度の経過

##### ◇第一回研究会 五月十三日（歴博）

研究の趣旨説明や総合展示第三・五・六展示室の現況確認などを行った。参加人数八名

##### ◇第二回研究会 七月二十一～二十三日（青森中央学院大学・東奥義塾 高校図書室）

一日目は青森中央学院大学開学20周年記念国際歴史シンポジウム「グローバル化の中の東北と近代移行期の「音」文化」を共催する形で、基調講演（デビッド・ハウエル「津軽海峡から世界へ」）を実施。

二日目は 同上シンポジウムの研究と総合討論を実施、歴博側の共同研究メンバーから谷本晃久・木村直也両氏が報告三本（山下須美礼「東北のハリストス正教と音楽」、鈴木啓孝「土族の近代と東北」、武内恵美子「弘前藩と音楽」）に対するコメントーターをつとめた。三日目は東奥義塾高校図書室が所蔵する弘前藩校旧蔵古典籍の調査・閲覧を実施。歴博側参加人数十名（うち二名は外部の臨時参加者）

##### ◇第三回研究会 十月二十八日（北海道博物館）

「北海道開拓記念館から北海道博物館へ―アイヌ民族・アイヌ文化の展示のあり方を中心に―」と題した小川正人氏による報告が行われた。報告後は質疑応答のほか、報告内容に関係する展示室の巡見も実施した。参加人数九名

##### ◇第四回研究会 三月二十三日（国立歴史民俗博物館）

シンポジウム「御真影奉護」の歴史と現在―奉掲所・奉安庫・奉安殿―を開催した。

発表者…樋浦郷子（歴博）「千葉県一宮小学校に見る奉護設備の歴史」  
発表者・ゲストスピーカー…佐喜本愛（九州産業大学）「奉安殿と地域社会―福岡県京築地域を事例として―」  
ゲストコメント…小野雅章（日本大学）

##### ◇個別調査 館蔵資料の調査・撮影（歴博）五月二十一日～六月十四日、三月十三日～十四日、三月二十七日～二十八日

#### 二〇一八年度の成果

五月十三日の第一回研究会では、研究の趣旨・目的について、具体的な成果発表（企画展示の開催や研究報告の刊行など）までを見通し、参加メンバー全員が共通認識を持つことができた。

七月二十一～二十三日の第二回研究会は、次のように実施した。一日目と二日目は、国際研究集会「グローバル化の中の東北と近代移行

期の「音」文化」を会場校である青森中央学院大学と共催したうえで、二十三日には弘前市の東奥義塾高等学校図書室資料調査を行った。

二十一日は、一般公開のもとデビッド・ハウエル氏（ハーバード大学）の基調講演を行った。世界の入り口かつその時代の中心地として青森や東北を位置づける講演内容は、日本史像の描き直し方を検討する本共同研究にとっても有益な手がかりとなった。二十四日は、原則として研究者に限定したうえで、研究発表および総合討論を実施した。本共同研究メンバーから、谷本晃久氏（北海道大学）、および木村直也氏（立教大学）がコメンテーターとして参加した。谷本氏は千島アイヌが近代に辿った歴史過程をふまえて、「アイヌ文化」なるもののなかで実は相対的に変化しうる「音」について鋭く指摘した。木村氏は、「音」に着目することによって民衆の姿、思想を明らかにしうる豊かな可能性について指摘し、充実した議論を行った。二十三日は弘前大学の渡辺麻里子氏の協力を得て、東奥義塾創設期の記録だけでなく、東奥義塾の前身である津軽藩校稽古館のテキストや津軽藩主の手元にあった「奥文庫」など、全国的にみて非常に希少な資料について調査した。関東では入手しづらい研究論文等は直接頂戴し、「奥文庫」等貴重資料は撮影する機会を得た。

十月二十八日の第三回共同研究会は北海道博物館において、北海道記念館から北海道博物館への改組、最新のアイヌ展示のありかた等について、メンバーの小川正人氏（北海道博物館学芸副館長）の説明のもと現地調査を行い、共同研究およびその成果報告にとどまらず、ひろく歴博としてアイヌ展示をどうとらえなおすかについても検討した。

三月二十三日の第四回共同研究会は、「御真影奉護」の歴史と現在―奉掲所・奉安庫・奉安殿―と題するシンポジウムを開催し、共同研究メンバー以外の研究者に対しても広く参加を呼びかけ、発表と質疑を通して当該テーマについての理解を深めることができた。

館蔵資料の個別調査（五〜六月、三月）では、近世後期から幕末の武

家の教育に関わる文書、幕末の風説留類、幕末維新期の洋学関係の書籍、明治期の高等教育関連、勸業博覧会関係、神道関係、医療関係、幕末・明治初期のアイヌ関連の資料などを出庫し、現物とその内容を確認するとともに、研究・展示の準備用として一部を撮影することができた。

## 二〇一九年度の経過

### ◇第一回研究会 四月九日（国立台湾歴史博物館）

「柯家」寄贈の学校関係文書群の実見、企画展「上学去（TIME FOR SCHOOL）学校へ行こう」の観覧、および本共同研究および歴博展示の方向性について、参加者による意見交換。参加人数六名（他に共同研究関係者以外の参加者八名）

### ◇第二回研究会 六月三十日（国立歴史民俗博物館）

二〇二一年度開催予定の企画展示「〈教え〉と〈学び〉の日本近代史（仮称）」の展示プロジェクト委員会も兼ね、共同研究の成果をどのように可視化するかについて検討。展示において各人が担当するコーナーの構成を考えると、使用する資料のリストアップ、解説文やキャプションの執筆など、これから必要となる具体的な作業に関しても質疑を行った。参加人数四名

### ◇第三回研究会 七月八日（国立歴史民俗博物館）

第二回研究会と同様の内容。参加人数九名

### ◇第四回研究会 八月二十七日〜二十八日（松本市・国宝旧開智学校／諏訪市・諏訪教育会館）

二十七日は松本市の旧開智学校の収蔵資料を調査し、教科書・教材・生徒作品・公文書などの近世・明治初期以来の豊富な教育史資料を見つけた。二十八日は諏訪市の諏訪教育会館において、諏訪教育会が所蔵する諏訪郡史編纂資料や高島藩士の旧蔵文書などの調査を実施した。参加人数七名

◇第五回研究会 二月三日（国立歴史民俗博物館）

二〇二一年度開催予定の企画展示「『教え』と『学び』の日本近代史（仮称）」の展示プロジェクト委員会も兼ね、研究・展示に関する現状と見通しについて発表し、意見交換を行った。途中、第一調査室にてアイヌ文献集（越崎宗一製本旧蔵）を閲覧。研究・調査の領域と班分けを以下の通りに定めた。一：幕末外交（保谷・木村・福岡）、二：明治の旧幕臣（樋口）、三：アイヌ（谷本・小川）、四：博覧会（塩原・落合）、五：医療衛生（石居）、六：学校教育（高木・北原・樋浦）。参加人数八名

※下記の日程・内容で予定していた第六回研究会は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で次年度に延期

◇歴博国際シンポジウム 三月二十一日（東京大学駒場キャンパス）

「近現代東アジアの文化基盤」 朝鮮史研究会・東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構韓国学研究センターとの共催。

趣旨説明 樋浦郷子

・発表一 丁世絃（国立慶尚大学慶南文化研究院）「日本植民地期における韓国の漢文教育の変化」

・コメント 禹龍濟（国立ソウル大学）

・発表二 呉成哲（国立ソウル教育大学校）「近代以後韓国書堂教育の社会的意味」

・コメント 八嶽友広（東北大学）

・発表三 陳培豊（国立中央研究院 台湾史研究所）「『同文異夢』の台湾、中国、日本—台湾における漢字漢文の戦前戦後」

・コメント 三ツ井崇（東京大学）

・ファシリテーター 木村直也（立教大学）

◇個別調査

石居・塩原・樋浦 資料調査・打ち合わせ（東京大学健康と医学の博物館） 六月二十三日

谷本 館蔵資料の調査（歴博） 七月九日～十日

樋口 館蔵資料の調査（歴博） 七月十日、二十二日～二十三日、八月一日、九月四日～五日、十二日、一月十五日

落合 館蔵資料の調査（歴博） 八月十四日～十六日

木村・保谷・福岡 資料調査・打ち合わせ（東京大学史料編纂所）

二月二日

樋浦 資料調査（沖縄県立博物館、石垣市立八重山博物館、石垣市立

図書館） 三月二十三～二十七日

二〇一九年度の成果

第一回研究会（四月九日 国立台湾歴史博物館）では、午前中、台南地域の元校長の家族である「柯家」から最近寄贈された学校関係文書群について、解説を受けながら実見。柯家は清朝時代の書房より教育者を輩出し、教案類や試験答案など教育関係の史料を多数伝えており、手稿類は台湾における「戦後」がどのように受け止められていたのかをうかがわせる貴重な手がかりとなる。午後は企画展「上学去（TIME FOR SCHOOL / 学校へ行く）」を展示担当責任者、張瀛之氏（展示組リーダー）の案内で見学。横断歩道を渡り校門をくぐるまでをモチーフにした展示室入り口、実際に使用されていた制服や学生証など、興味をひきつける工夫がこらされていた。以上をふまえ、本共同研究および歴博展示の方向性について、参加者による意見交換を行った。包括協定を結んでいる台湾歴史博物館との交流を、本共同研究と研究目的を共有できる企画展を通じて実施できた。第四回研究会（八月二十七日～二十八日 松本市・国宝旧開智学校／諏訪市・諏訪教育会館）では、国宝となった旧開智学校校舎とともに、「重要文化財級開智学校資料」を実見し、明



治期から大正期の唱歌や歴史、修身の指導案だけでなく、児童の答案の保存状態の良さを確認できた。また、学校日誌には、関東大震災が地方にどのように伝播し、対応を迫られたのかという点が克明に記録されていることが判明した。これは、すでに一部翻刻が刊行されているものの、肉筆のままどこかの機会をみつけて公開すべき貴重資料という意見で一致した。諏訪教育会館では、高島藩士小沢家文書・高島藩家老千野家文書など、諏訪教育会が郡史編纂のため収集・保管している原文書類を手に取り、幕末から明治初期にかけての藩校関連の史料を中心に閲覧し、国学の影響が少なくなかった同藩の教育事情を確認することができた。

二〇二一年度開催予定の企画展示「〈教え〉と〈学び〉の日本近代史（仮称）」の展示プロジェクト委員会も兼ねた、第二回、第三回、第五回研究会では、本共同研究を展示につなげるべく、展示全体の趣旨や各人が担当するテーマと内容について検討を行い、展示候補となる資料レベルにまで具体化をはかるべく展望した。

個別の調査では、歴博の館蔵資料、特に産業史・産業教育史・博覧会関係、アイヌ・北海道関係、旧幕臣関係については集中して対象資料の洗い出しを行った。それにより、研究・展示に活用できるものを見極めるとともに、その中から展示を想定できるものを峻別し、リスト化することができた。

研究および企画展示のための資料収集としては、幕臣により幕末に刊行されたアイヌ語辞書、明治初期の神道国教化に関わる資料、お雇い外国人関係資料、明治期の癩病治療関係資料、明治前期東京の書画人名録、青年団関係資料、植民地教育関係資料などを入手することができた。

## 二〇二〇年度の経過

◇第一回研究会 十一月八日（国立歴史民俗博物館およびオンライン参

加）

二〇二一年度開催予定の企画展示「学びの歴史像―わたりあう近代―」展示プロジェクト委員会を兼ねる。

参加人数 九名

◇第二回研究会 十二月一日（オンライン）

落合 功 「近代桐生織物業の展開と森山芳平―森山芳平の学習活動と教育活動を中心に―」

樋口雄彦 「幕臣柴田剛中日記にみる書籍と公務・生活」

参加人数 九名

◇第三回研究会 十二月十四日（オンライン）

福岡万里子 「幕末・明治初期、日本の地理情報をめぐる「学び」の相互作用」

塩原佳典 「筑摩県下博覧会にみる「開化」の諸相」

参加人数 九名

◇第四回研究会 三月八日（月）

樋浦郷子 「特集展示（国際展示）「東アジアを駆け抜けた身体―スポーツの近代―」について」

開期一月二十六日～三月十四日の同展に関する解説

※共同研究「近代日本における産業・労働の展開とジェンダー」との共同開催

参加人数 八名

◇班毎での打ち合わせ

小川・谷本・樋浦 アイヌ関係 九月十三日

北原・石居・樋浦 学校・衛生関係 九月十四日

小川・谷本・北原・石居・樋浦・得能壽美（ゲストスピーカー） アイヌ・

学校・衛生関係 十二月七日

北原・高木・樋浦 学校関係 二月二日

◇個別調査

- 落合 織物業資料調査（群馬県立歴史博物館） 七月十七～十九日、  
一月二十八～三十一日  
樋口 館蔵資料調査（歴博） 七月一日、十三日、十月七日  
落合 塩業資料調査（野崎家塩業歴史館） 一月七～九日  
落合 塩業資料調査（岡山県記録資料館・倉敷市歴史史料整理室・野  
崎家塩業歴史館） 三月二十八～三十一日

二〇二〇年度の成果

第一回研究会（十一月八日 国立歴史民俗博物館およびオンライン）  
では、共同研究の成果としての企画展示について、各メンバーが提案し  
た展示構想を確認しあう機会となり、総合的な検討や調整を行うことが  
できた。具体的には、各自の研究内容に対応した担当コーナーの構成案  
や展示資料リストを提出し、その意図について検討を加えつつ、内容等  
の調整をはかった。さらに今後必要となる資料確定や解説パネル・キャ  
プション・図録原稿執筆など、諸作業の方法・行程についても確認し、  
意志の統一を行った。会議終了後には、開催中の企画展示「性差の日本  
史」を観覧し、次年度の展示計画の参考とした。

第二回研究会（十二月一日 オンライン）、第三回研究会（十二月  
十四日オンライン）では、報告と質疑応答を通じて、主として共同研究  
の成果として刊行する『研究報告』へ投稿する論考のテーマに関し、予  
備的に周知することにもなり、メンバー同士で議論することでその内容  
を深めることができた。

第四回研究会（三月八日）は、スポーツに関する展示解説を通して、  
狭義のスポーツ史のみならず、帝国と植民地、ジェンダー、医療・衛生  
史といった観点からも共同研究のテーマを深める機会となった。

研究および企画展示のための資料収集としては、沖縄の学校教育史資

料、明治の新宗教・カトリックの教義書・教団資料・機関紙、幕府の陸  
軍所が刊行したアジア地図、明治初期に海軍省水路寮が作成した海図、  
博覧会関係錦絵、大正初期の町村是資料などを入手することができた。  
なお、前年度から今年度に延期した歴博国際シンポジウム「近現代東  
アジアの文化基盤」（朝鮮史研究会・東京大学大学院総合文化研究科ク  
ローバル地域研究機構韓国学研究センターとの共催）は、新型コロナウイルス  
感染拡大の影響が続いたため、取り止めとした。

四 全期間の研究成果

近代を見る相互性・双方向性という見方の獲得

学知・教育というテーマから近代の成立、ひいては「国民」の形成過  
程を見直すことを通じて、史実に現れる人や情報の移動・コミュニケー  
ションの相互性・双方向性に迫ることの重要性が確認できた。たとえば、  
「教える」「学ぶ」といった行為も、多数派から少数派へ、強者から弱者  
へ、伝統から近代へ、欧米からアジアへ、中央から周縁へ、勝者から敗  
者へと、一方向で立ち現れるものではなく、緊張感に満ちた互いの渡り  
合いの中で変容のプロセスが進行していった（もしくは進行できなかつ  
た）といった点である。

展示への集約を目的とした館蔵資料の総点検

本研究は、企画展示さらには総合展示第5展示室リニューアルへつな  
げることを意図したものであるが、その際に主要な対象となる館蔵資料  
を総合的かつ徹底的に再確認する作業をともなった。その結果、幕末・  
明治の国際認識や地理情報、近代化における旧幕臣の文化史的位、博  
覧会とその役割、近代的な医療・衛生の受容と反発、アイヌにとつての  
近代、学校という装置が持つ意味、といった諸テーマから「国民」形成  
の複雑さを展示で表現することをめざすとともに、その手段として既存

の館蔵資料を研究・展示の素材として最大限に活かすこととなった。他方でそのプロセスのなかでは、館蔵資料の収集の基盤となってきた歴史学の観点、すなわちこれまで当館が、どういう問題意識で近代関係資料を収集してきたのかを点検する機会でもあった。例えば、アイヌに関する絵画等資料はあくまで支配者側の観点のものに限定されているということや、ハンセン病史にかかわる資料が皆無であることなど、最先端の研究への対応や「多数派の歴史叙述」の間隙を探索する姿勢に不足な点があることも明らかになった。

#### 企画展示の実現へ

本共同研究の成果は、直近では企画展示「学びの歴史像―わたりあう近代―」（二〇二二年一〇月二日～二月二日）において発表された。その展示構成は、「第1章 世界と日本の認識をめぐる〈学び〉」、「第2章 明治の文化・教育と旧幕臣」、「第3章 博覧会がめざした「開化」「富国」、「第4章 「文明」に巣くう病」、「第5章 アイヌが描いた未来」、「第6章 学校との出会い」という章立てである。これらの展示内容を通して、学校でのそれを中心とする狭義の「教育」とは違う、近代化の過程における「学び」の多様性を示すことができた。

#### 五 研究組織

（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

石居 人也 一橋大学大学院社会学研究科・教授

小川 正人 北海道博物館・学芸副館長

落合 功 青山学院大学経済学部・教授

木村 直也 立教大学・特任教授（当時）

北原かな子 青森中央学院大学・教授

塩原 佳典 畿央大学教育学部・准教授

高木 博志 京都大学人文科学研究所・教授

谷本 晃久 北海道大学大学院文学研究科・教授

保谷 徹 東京大学史料編纂所・教授（当時）

福岡万里子 本館研究部・准教授

○樋浦 郷子 本館研究部・准教授

◎樋口 雄彦 本館研究部・教授

（国立歴史民俗博物館研究部）